

城東区のこれまで

城東区の誕生

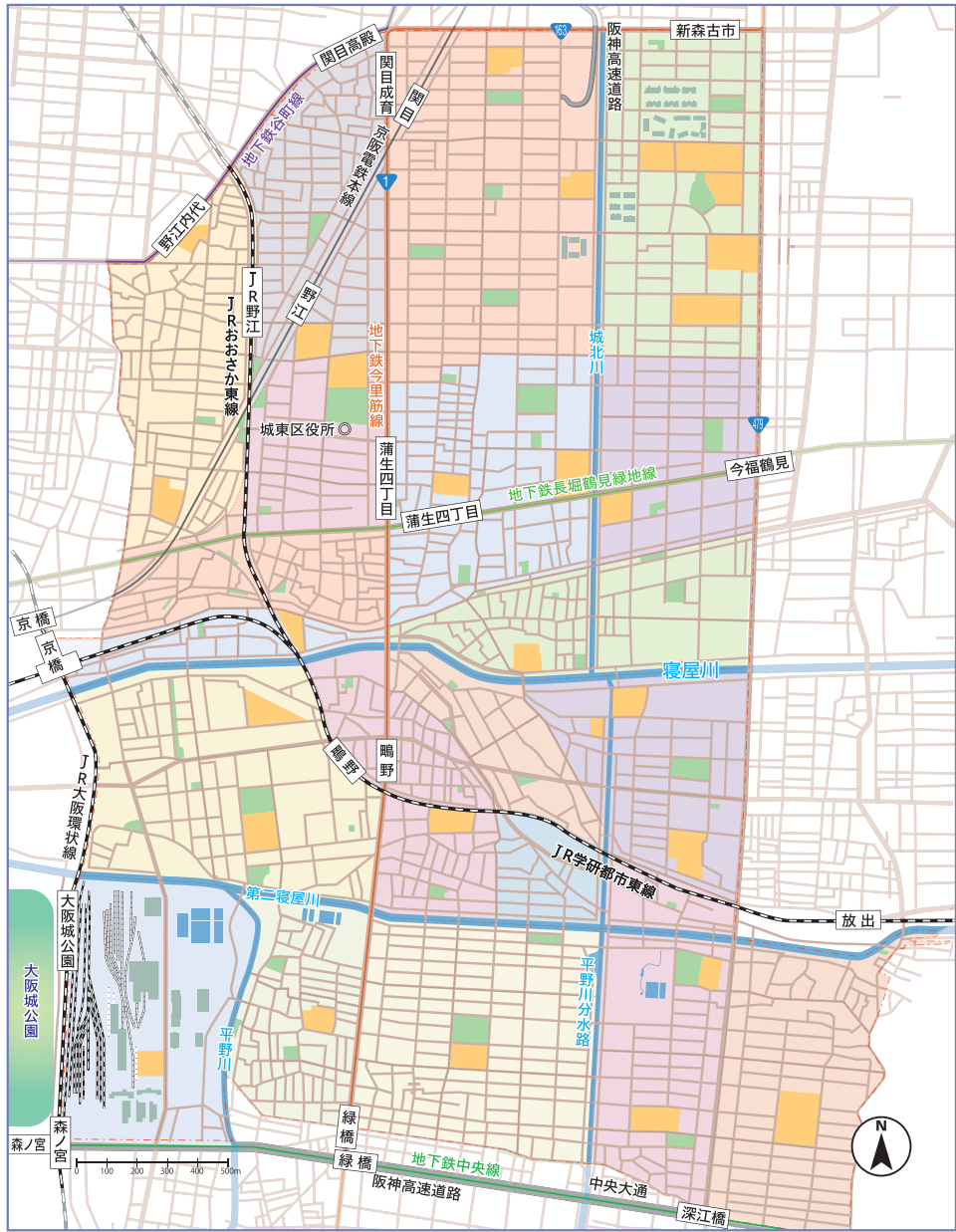
昭和18(1943)年4月1日、大阪市の22区制の実施に伴う7増区として、旭区の南部と東成区の千間川以北が城東区となりました。面積は11.95km²で当時の市内22区中5位、人口は13万870人で11位でした。区役所は蒲生4丁目交差点の東南角に木造2階建てが新築されました。また、区役所の開設とともに城東保健所の設立も認可され、昭和19(1944)年1月、今福南の今福健康相談所内に開設され、当時の国民病といわれた結核予防を中心に母

蒲生4丁目交差点南東角にあった旧城東区役所（昭和30年頃）



子健康相談、栄養相談などを行い、特に終戦後の混乱期には伝染病のまん延防止に活躍しました。

現在の城東区



京橋駅爆撃被災者慰霊碑（JR 京橋駅南口）



空襲

戦争が悪化するにつれ空襲がひどくなり、大阪市内の空襲は昭和20(1945)年1月3日から終戦前日の8月14日の大阪砲兵工廠の大空襲まで計28回に及び、全市の27%が消失しました。

城東区は、空襲の回数が比較的少ない地域でしたが、鳴野地区は造兵廠や軍需工場に対する空襲でかなりの被害が出ました。鳴野の鐘紡大阪工場が全焼したほか、野江東之町や関目町に被害が出ました。蒲生4丁目交差点にあった城東区役所庁舎も焼け落ちました。

8月14日の空襲では、城東線（現 JR大阪環状線）京橋駅に1トン爆弾が命中、確認されただけで乗客などの死者は236人にのぼりました。京橋駅南口前には被災者慰霊碑が建立されています。

終戦と復興

昭和20(1945)年8月15日、長い戦争が終わりを告げますが、敗戦の衝撃に加え、その日を生きる苦しみが始まりました。衣食住は一層窮迫し、生活難に伴う犯罪、発疹チフス、コレラ、結核などの伝染病が増加し、物価は高騰しました。

当時の城東区の人口は、大阪市民生部の調査によると、昭和20(1945)年10月5日現在、空襲前人口12万3,481人に対して7万8,579人と36%も減少し、被災家庭では電灯も水道もない中で、生き残った家族が肩を寄せ合って苦難に耐

えていました。

焦土と化した大阪再建のため、大阪市は昭和20(1945)年9月、いち早く復興局を設置し、被災地の応急対策を進めるかたわら、街路、公園、土地区画整理、交通、港湾など6項目の復興計画を決定しました。

これに歩調を合わせ住民も少しずつ立ち上がり、城東区では昭和20(1945)年10月に地域の若者が結束して復興をと青年団協議会を結成、翌年の2月には闇市の横行と悪性インフレの中で小売業の正常化に向け商店会連盟を結成、また同年には生活保護法制定に伴い民生委員協議会も発足しています。

昭和24(1949)年8月には城東区地域振興会・赤十字奉仕団の前身となる城東区赤十字奉仕団が結成され、小学校校区ごとの9連合で構成し、地域に密着した活動を展開しました。同年4月には城東区婦人団体協議会、保護司会も発足し、昭和26(1951)年1月には城東区社会福祉協議会が結成されました。

経済復興

城東区の工業化を支えてきた砲兵工廠は、昭和20(1945)年8月14日の空襲で1トン爆弾300発を浴びて廃墟となり、75年の歴史に幕を閉じました。周辺にあった多くの工場も爆弾や焼夷弾に焼かれ、見渡す限り一面の廃墟となってしまいました。

昭和25(1950)年に朝鮮戦争が始まったのをきっかけとして、日本商品の海外特需は増大しました。経済復興は急速なテンポで進み、昭和30年代に入ると、高度経済成長の波はさらに加速し、神武景気、岩戸景気などの流行語が生まれました。

民間企業の設備投資は飛躍的に伸び、消費ブームが起き、テレビ、洗濯機、冷蔵庫が「家電の三種の神器」と呼ばれました。もともと、家電製品などを生産してきた大阪経済は、全国平均をはるかに上回る高度成長を遂げました。

寝屋川・第二寝屋川沿いや城北川を中心に金属・機械・化学関係の工場が集中する城東区は、生野区、東成区とともに市内東部の工業地帯を形成し、その中核を占めるまでに成長しました。